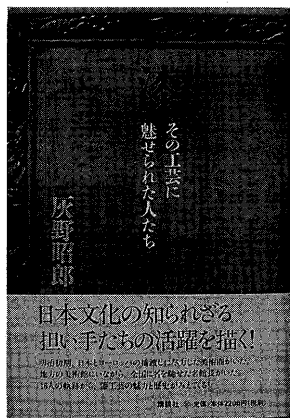


新刊紹介

灰野昭郎著

『漆 その工芸に魅せられた人たち』

田畑久夫



2001年9月10日発行
講談社
四六判 276頁
定価 2200円+税

さて本書は、

はじめに —— 九〇〇〇年を生き抜く伝統の技

第一章 海を渡った開拓者たち

第二章 変わる技、変わらない技

第三章 コレクションの楽しみ

終章 漆工芸史の研究者たち —— 名著・労

作が生まれるまで

あとがき —— 漆は二一世紀を生きられるか

という、はじめにとあとがきを除いて、四つの章から構成されている。順を追ってその内容を紹介していこう。その前に、著者は本書のはじめにおいて、「漆そのものではなく、日本独特の漆工芸の装飾技法として、蒔絵を中心述べたい」(2頁)と論じているように、本書の中心課題は蒔絵であり、漆全般が対象となっていない点を指摘しておくきたい。その理由として、「私(灰野——筆者註)は漆工芸、特に蒔絵は世界に誇れる日本の工芸品であると心底から信じている。また、その歴史を研究してきている。」(4~5頁)からであるという。

蒔絵は近世初頭(一六世紀末)、当時来日していたキリスト教の宣教師や東インド会社の社員の眼にとまり、ヨーロッパに輸出されたのを皮切りに、以降鎖国時代の長崎出島を通して膨大な量が海外に持ち出された。第一章では、明治時代に蒔絵を

Chinaの意味を問われれば、まさか中国と答える人は誰一人としていないであろう。多くの人々は陶器と答えるに違いない。それに対して、Japanの意味はと問われれば、漆と即座に回答する人は皆無だった。これは現在の学生諸君の話ではない。当時(昭和10年ごろ)の高等小学校や中学校の校長先生方の話である。このエピソードの提供者は、非常に顕名な漆芸家であり、かつ人間国宝でもあった松田権六である。(48~49頁)

本書は、右で述べられたような漆工芸に関する大変興味深い話を、それに魅せられた人々から取材して構成されているという点が最大の特色といえよう。本書を紹介する前に、筆者が本書に興味・関心をもった理由を最初に明らかにしておきたい。筆者のライフワークの一つに、木地屋(木地師とも呼ばれる)が木地轆轤という木地屋独自の工

具を用いて、木製の椀や盆などを製作する工人の研究があげられる。木地屋は使用する材料の樹種が広葉樹に限定される。そのため、針葉樹が卓越する北海道を除く全国の山中にかつては数多くみられた。しかし、現在では、安価な陶芸製の椀などが大量に出回っていることから木地製品は不振となり、木地屋はほとんど姿を消してしまった。そこで、現在でも木地屋が活躍している中国南部の山地やチベット地方にまで足を延ばし調査を継続している状態である。

かかる木地屋が何故漆と関連するかといえば、木地屋が製作する椀や盆に代表される木地製品は、基本的には漆をかけない白木地のままで出荷する。しかし高級品には、それに漆をかける。輪島塗などはその代表である。そのようなこともあり、漆に興味・関心をもった次第である。

ヨーロッパに普及させるのに大いに貢献した、林忠正、小泉軍治、松田権六、和田節治の四名をとりあげた。これら四名の共通点は、実際にヨーロッパに出かけたことである。彼らが具体的にどのようなにして、ヨーロッパ人に蒔絵を中心とした漆工芸を普及させたのが、詳細な取材の下に述べられている。

上述したように蒔絵を中心とした漆工芸は、かなり早くからヨーロッパにその存在が知られていたが、一部の人々に限られていた。そのなかでも、英国柔道の父と称された小泉軍治の本業が漆器製作の漆工芸であり、それが事業としても大きな成功を収めたことを、イギリス在住の娘に直接取材して聞き出すなど、興味がつきないエピソードが随所にみられる。

第二章は、蒔絵を中心とした漆工芸の伝統技術を、種々の方面から守っている、美術商、漆器業者、漆工芸者五名について、漆工業をどのように守っていくかに関しての内容が主体となっている。本章では、大学理学部を卒業し、工学博士でもある豊島清が晩年より漆工芸に関心をもつようになり、一流の漆工芸家として成功したプロセスに関して、非常に興味をもたれた。

第三章は、著名な蒔絵のコレクター四名に焦点を合わせ、それぞれの立場からみた蒔絵コレクション

の楽しさを生き生きと描いている。

終章は、蒔絵を含む漆工芸史の研究史である。本章では、特に研究史上業績をあげた黒川真頼、沢口悟一、吉野富雄の三名の研究者をとりあげ、それぞれの主著の解説を試みることで、研究史をあとづけているという点に、特色がみられる。本章は漆工芸に関心を有する若き研究者や学生諸君にとって大変有益な章だといえる。

さらに、本書の最後には著者作成の近代漆工芸史年表が付けられている。この種の詳細なのが従来存在しなかったので、漆工芸を研究しようとする研究者にとっては貴重な年表で、利用価値も高い。

以上論じてきたように、本書は蒔絵を中心とした漆工芸に関する著作といえる。文中でも言及したように、著者が直接本人あるいはその子息などに会って取材を試み、資料を収集し、それに基づいて記述されている。そのため、本書全般にわたって非常に話得力がある。また、その時に収集した数々のエピソードも散りばめられているので、大変興味をもって読むことができる。漆工芸を学習しようとする学生にとっては、本書は最適であると思われる。著者の深い学識にふれる最大の機会を本書が提供しているので、多くの人々が読まれることを切に期待する。

なお、著者は、早稲田大学文学部で美術を専修した後、長年京都国立博物館に勤務された。そこでは、漆工芸を多くの人々に理解してもらおうための活動を幅広く行なってこられた。漆工芸研究の第一人者である。本書のあとがきの最後に書かれているように、「わが国の漆工芸が二一世紀を生き続けることができるのか」(262頁)を真剣に問いただす好著であるといえよう。

最後に、木地屋に興味・関心をもつ筆者にとっては、著者が危惧されている漆工芸と同様、二一世紀つまり将来も生きられるだろうかという問題に、碗や盆などを製作する工人である木地屋もまさに直面しているのである。否、木地屋のほうが早く消滅する可能性が高いと思われる。それ故、筆者は海外に木地屋を求めて出かけているのである。しかし、蒔絵を中心とする漆工芸の場合、冒頭に述べたが「*Japan*」が代表するように、日本以外でその技術を継承することは、本書で述べられた小泉軍治の例も存在するが、不可能であろう。それは、蒔絵を中心とする漆工芸が著者のいう「日本文化の一端」(5頁)を担っているせいかもしれない。